

「坊ちゃんの温泉句」

黍遠し河原の風呂へかち渡る 漱石

漱石の句ですが、国内のどこかの温泉の情景かといえさにあらず、中国大陸の広大な荒野の中にある小さな温泉なのです。その名を熊岳城温泉。

漱石は友人中村是公（当時満鉄総裁）に招かれて、明治42年(1909年)9月から10月にかけて満州・朝鮮を旅行しますが、その途中立ち寄ったのが、今の大連と瀋陽の間にあるこの温泉。「坊ちゃん」でも見られる温泉好きの漱石は二日続けて湯につかります。漱石日記9月12日に「熊岳城着、トロに乗って十八町、一軒の宿屋に着く・・・崖を下ると前に河がある。川の深さは一尺足らず、水の幅は十間に足らず。沙の中に小屋を立てて地を掘ったものが温泉である・・・朝湯に入る。熱甚し。・・・主婦記念帖を出して頻りに字を求む・・・」などと書かれています。

私はその温泉のある人口数百人という小さな日本人街に生まれ、小学5年生まで過しました。河原の砂地をスコップで掘ると湯が湧き出し、入浴が終わると埋め戻して帰る、という素敵なところでした。温泉には一軒だけ旅館がありました。

戦後引揚げて数十年、その小学校の同窓会誌に、私より数年上の形田幾代さんが一文を寄せてくれました。実は彼女はその旅館のお嬢さんでした。つまり漱石日記中で頻りに字を求めた主婦のお孫さん。形田さんによれば、彼女の祖父が日露戦争直後、偶然熊岳城に来て温泉の湧出を知り、時の軍政官に乞うてその周辺二万坪を借り受け、明治39年から旅館業を始めたそうです。漱石の来

訪はその3年後。形田さんの文章から「その間、古くから有名な方々が熊岳城温泉に来られ「芳名録」なるものが布製の重厚なもの2冊ありましたが・・・」敗戦後日本人総引揚げのとき、それを天井裏に隠したそうです。「平成2年訪れた熊岳城温泉のわが家の両親の部屋を見たとき、天井を見た瞬間ああと息を飲みました。引揚げのとき隠しておいたそれが或いは発見できるかと楽しみにしていましたが、すっかり破壊されていました・・・」

冒頭にあげた句が、その芳名録にあったもので、その他に

野の中に桜四五本生湯かな 大町桂月

川の湯をからけて渡る浴衣かな 巖谷小波

満州はよろしきところ支那人が人にやらじといふはことわり 長谷川如是閑

などもあったとか。念のため岩波の漱石全集10巻の句集を見ると、

熊岳城にて

黍遠し河原の風呂へ渡る人

黍行けば黍の向うに入る日かな

とあり、「芳名録」の句は一部改作されたようです。

なお、黍とは、文脈からも高粱であることはあきらかです。地平線から日が昇り地平線へと沈んでゆく大陸の温泉につかって、坊ちゃんは道後の温泉とは違う感慨をもったことでしょう。いつかどこかからその「芳名録」が忽然と現れないものか・・・ (2010.10.17)